

集合住宅の戶外生活は、公園やプレイロットなどの特定の空間だけでなく、道や住棟まわりなどのあらゆる空間で行なわれている。住棟まわりの空間は、本来、日照、プライバシーの保護など、快適な居住環境を確保する場である。しかし、その空間も人々の様々な利用によって無秩序な空間となってしまう。ここに、住棟まわり空間の存在の意味を生かしながら積極的に活用させる空間構成を考える必要性が生じる。そこで、本研究は住棟まわり空間の物理的形態とその行動特性との対応関係を、実態調査を通じて明らかにし、住棟まわりの空間が戶外生活空間として有効に活用されるための計画的知見を得ることを目的とした。

《調査概要》対象地区：建設後10年以上経過した中層賃貸団地で、千里青山台、千里津雲台、高槻玉川橋、泉北桃山台、奈良平城サ2である。調査方法：物理的形態は施設、樹木、裸地などの現状を観察により図面上に記入。行動特性は、人々の行動内容、範囲、軌跡を性別・年齢別に図面上に記入。調査時期：昭和56年10月～57年10月。

《結果》■自転車置場、花壇、遊び場などへのアクセスは、ショートカットによるほみだれ通行が多く、芝生の裸地化が著しい。■樹木の存在は、人々の行動のよりどころとなる。■住棟まわりの空間では、幼児、小学生修学年によるままごと遊びなどが多く、活動的なボール遊びや乗物ごの遊びは、道空間で行なわれている。

これらの実態は、諸施設の配置と動線計画のあり方、植栽計画、そして、それぞれに空間に対する質的配慮の重要性を示している。